

セツ のしん

NO.64



目次

ひと言	高橋 正行	1
3・11から6か月 学校再生への道を考える		
復旧とは、復興とは	渡辺 孝之	2
震災は些事に過ぎない	平居 高志	3
被災地が求める学力とは、 地域に根ざした社会参加の学力	徳水 博志	5
報告		
「震災体験から 地域・学校・子どもたちを」語り合う 一緒に歩いていきます、これからもずっと	細川 光	13
浜通りを通して帰りました	石本日和子	16
派遣で来ています	鈴木真之助	15
次にどうつなげ、語っていくか	朝岡 晶子	17
会員から		
いま動き出している事実をこそ学びたい	藤田 康郎	17
教室から 校庭たんけん	成田 郁子	18
戦後教育実践書を読む会に参加して 第1回「山びこ学校」を読む	浅井 時子	20
歌 ひまわりに希望をたくして	石垣 就子	22
本の紹介	大山あけみ	24
センターのうごき		24

ひと言

社会のあり方を直撃に振り返りたい

高橋 正行 (センター運営委員)

人間の科学が万能とは思わない。しかし、今回の地震・津波をほとんど予想できなかった地震・津波研究、周回計算のもとに作られたはずの岸壁や防潮堤の破壊にショックを受けた。

この震災は、私たち人間が発展させてきた科学をはるかに越えるものだったのか、それとも自然のとらえ方あるいは研究の方法に問題があったのか。もちろん私には分からない。

震災直後生徒たちは、津波を目前にし、死を覚悟しながら助けを求める人々を救った。そして避難所では被災した人々を救援するため日夜奮闘した。避難所の子どもたちは年齢の違いをこえて遊び、勉強を教え合い、震災後の街づくりを語り合った。

大震災は日本と世界にエネルギーや経済など社会のあり方を改めて提起した。経済効率優先の新自由主義がどんな社会をつくったのか、教育現場にどのような影響を与えたのか。

私たちはもう一度真摯に振り返る必要があるように思う。私たち教師が復旧・復興を担う子どもたちに語りかける言葉は？ そんなことを考える毎日である。

3・11から6か月

学校再生への道を考える

復旧とは、復興とは



渡辺孝之

3月11日、私たちの母校、浜市小学校は破壊された。しかし、児童と教職員は全員奇跡的に助かった。翌12日、私たちは浜市小を脱出して東松島高校を第2次避難所としてお借りし、高校の保健室を臨時の職員室とし避難民とともに3月31日まで過ごした。

新年度前に学校を明け渡すべきだという避難民とともに私たちも3月31日東松島高校を出て、小野小学校3階音楽室をお借りして新たな職員室とした。小野小からは3階1フロアを丸々お借りし、6学年分の教室を開設し、4月21日始業式・入学式を行い、新年度をスタートさせた。

震災から5か月。毎日が失われた物資を補う日々だ。子どもたちが失ったもの、学校が失ったもの……：学校の職員室、校長室、図書室、保健室、家庭科室・準備室、給食配膳室、1年教室、特別支援教室、放送室、用務員室、職員更衣室、体育館、体育倉庫、園芸倉庫、器具倉庫においてあつた全てのものが失われた。

困難なのは何が失われたかも分からないということだった。子どもたちの学用品も失われたが、どの業者が納入したのか、その資料すらない。ただ、ただ記憶だけが頼りの日が続く。それでも、私たちが小野小音楽室をお借りしたときには、図工用の工作机があるだけだったが、パソコンが届き、机が入り、今では職員室の雰囲気になってきた。児童の学用品や教材もほぼ整いつつある。国内・国外からの支援に感謝の気持ちでいっぱいだ。

震災直後、被災者に「何が欲しいですか」と尋ねると「家、クルマ、ガソリン」という答が返ってきた。私が同じ質問を受けたら即座に「学校」と答える。いくらモノで満たされても、私たちには帰るべき学校がない。私たちに復旧があっても、復興はない……そんな悶々とする日が続いている。

東松島市では、鳴瀬地区4小学校2中学校の将来構想を検討している。このほどその素案が示されたが、その内容は「統合型」「二貫校型」「併設校型」の3案で、単独校型は姿を消している。

津波から生き残った私たち浜市小が、今、消えてしまいかもしれない瀬戸際に立たされている。私たちが必死で守り抜いたのは何だったのか……。

震災からの復興は、震災という不幸を乗り越え、今よりもよりよい未来、素晴らしい明日を築くことだと考えている。

夢や希望を現実にする大人の姿勢を子どもたちに見せなければならぬ。

復興は10年単位で考えなければならぬ事業であり、今の子どもたちが明日の復興の担い手になる。その子どもたちに現在の大人たちからのメッセージをしっかりと伝えることは何よりも大切だ。

多くの困難な中、子どもたちのためにあなたたちの母校＝浜市小を再開できるように大人たちは全力を尽くした、そんな姿をしつかりと目に焼き付けて欲しいと私は願っている。

市が単独校型の選択を躊躇するのは財政面に起因すると思われる。逆に言えば、財政が許せば浜市小は存続させることは可能である。政府は復旧に向けて財政支援を留意している。23年度文科省第1次補正予算では、学校施設等の復旧に962億円（公立学校分）を計上している。

地方公共団体からの要望に対して、文科省は「第1次補正予算において予算を計上し、公立学校施設災害復旧費国庫補助負担法による2/3の国庫負担と激甚災害法による嵩上げの他、国庫負担金以外の地方負担分については、95%に相当する額が後年度に交付税措置され、ほぼ自治体の負担はなくなっているところ」と対応状況を説明している。その通りだとすれば、わずかの自治体の負担で被災学校の復旧が可能であるということである。25億円の建設費のうち4000万円程度の自治体負担でよいということだ。それでも自治体にとつての負担は軽視できない。

さらに「原形復旧」という法律の条件や用地取得の課題などもある。特に用地取得について国は全く財源を示していない。菅内閣の政争の影響はこんなところにも波及しているのである。新たに用地を取得して、同時に複数の学校を建設する作業を1つの自治体で進めなければならぬ。これも容易ならぬ事態である。

しかし、同様の課題をかかえる自治体は東松島市にとどまらない。同様の課題に直面する自治体と共同で、国や県のバックアップを求めることで可能性を切り開いていかなければならぬ。

震災後の学校統廃合の問題は、既に帰るべき校舎を失っているという点で、従来の統廃合問題と決定的に異

なる。時間をかければ、住民は地域から離れ、統廃合は既成事実化していく。しかし、1年や2年で決着の付く問題でもない。間借りしている学校の負担は重い。早く見通しを示してくれという気持ちも切実である。

さらに、地域住民も現在では仮設住宅に入居し、点在し、意見集約も難しくなってきた。

それでも、学校の再建は地域復興の大きな鍵のひとつであることは間違いない。地域と学校が力を合わせて学校を再建すること、そのことが希望を紡ぐことにはかならない。

(石巻・浜市小学校)

震災は些事に過ぎない



平居高志

水産高校は、今回の震災により、移転を余儀なくされました。津波によつて学校が大破したからではありません。地震によつて校地が沈下し、津波による水が引いた後も、毎日、満潮時刻に合わせて校舎が冠水するようになってしまったためです。校舎の基礎部分にひびが入ったことも指摘されています。

現在は、石巻北高校の校庭に建つプレハブの仮設校舎で授業を行っています。JRが完全に復旧していないために、通学が困難な生徒もいますし、多くの生徒が自宅流失・大破してしまったため、親戚の家や仮設住宅から通っているなど、生徒を取り巻く環境はまだまだ厳しいものがあります。

教員も、長距離通勤者がとも増えました。

プレハブ校舎は、当初想像したよりもずっと立派なものでしたが、それでも、隣の教室の音がよく聞こえて邪魔になる、スペースが狭くて図書室は不完全、面談も部活も制約が大きい、といった悩みはあります。

更に、宮水の目玉とも言える、海や水産加工場をフィールドにした実習がまったくできていません。生徒にとつても教員にとつてももどかしく、ストレスのたまる状況です。

しかし、何よりも深刻なのは、新生宮水がいつ、どのような形でスタートするのが全く見えないということです。

冠水対策の進捗を受けて、県は、7月22日に、水産高校を渡波の元の校舎で再開することを発表しました。しかし、それが何時になるのか、そのためには校舎についてどの程度の改修が必要なのか、具体的には何も見えないのが現実です。先が見えていないの仮設暮らしと、見えていないのでは全く違います。人間は、「あそ

ここまで我慢しよう」という目標が必要なのです。

見通しが立たないことは、新入生の募集に大きく影響します。そして、宮水がそのために大きく定員割れを起こせば、宮水が普通科とは比較にならない膨大な維持管理費のかかる高校だけに、やがてその存在価値が疑われるようになり、統廃合の対象にもなりかねません。宮水が、地域の水産業界と密接に結びつき、それを支えてきたという歴史を持つだけに、果たしてそれでいいのかどうか……？

ですから、もちろん県には早く具体的なビジョンを示してもらわなければなりません。これは、宮水と石巻水産業界の死活問題です。

「しかし」です。

以上のようなことは、いわば誰の目からも見える、当たり前の、いわば事務的なことです。

これが「学校の再生」だとすれば、わざわざ論を為す必要もありません。学校を本当の意味で「再生」させることを考えた時、私の頭に浮かんでくるのは、結局、教員に対する上意下達の管理統制、くだらない形式やパフォーマンスによる構造的な多忙化、それらによる窮屈で徒労感の大きい日常の業務といった、震災以前からある教育行政に関わる諸問題ばかりなのです。それらの根深さ、深刻さに比べれば、私には、震災による問題など、単純明快で実に些細なものしか見えません。

(石巻・宮城県水産高等学校)

被災地が求める学力とは、



徳水博志

地域に根ざした社会参加の学力

3・11から6か月が経過した。石巻市雄勝町は中心部の街並み自体が消え、校舎が壊滅した雄勝小、船越小、雄勝中の3校は、飯野川地区で間借り授業を行っている。私も雄勝の自宅を流失し、近くに住んでいた肉親3名を亡くした。この3・11によって肉親を失った慟哭と故郷を失った大きな喪失感に襲われたが、雄勝のまちづくりに主体的に参加することによって癒されていく自分を発見した。この自己回復のプロセスで到達した認識は、《人とつながり、希望を紡ぐ》という思想であり、教育面では「地域に根ざした教育」の再発見である。

石巻の復興は10年から20年が必要と言われる。その石巻の復興を行うためには、「学校の適正規模・適正配置」

以前に、石巻独自の復興教育を中核とした教育観への大転換が必要である。それについて三点提案したい。

一つ目は子ども観の転換である。《子どもは10年後の石巻復興の主体となるべき、地域の宝》という子ども観への転換である。石巻の子ども達に対して地域住民は、「この地域に残ってほしい、地域復興を担う主体になってほしい」という願いを持っている。石巻の子ども達は、愛すべき故郷・石巻の復興を担う主権者である。けつして国家の人材でもなく、海外に進出している多国籍企業の人材でもない。そのような人材観はもはや被災地には不要である。もちろん3・11以前にも不要だったが、それが明確になった。

二つ目は学力観の転換である。現行の学習指導要領の目指す学力「生きる力」（正しくは、多国籍企業の経済的価値を求めて競争を勝ち抜くための生きる力）は、被災地の学校には不要である。

被災地が求める学力とは、地域に根ざして生きる学力、つまり《地域を愛し、地域を復興する社会参加の学力》である。子ども達が被災した故郷に残り、故郷のまちづくりに参加し、故郷を復興する社会参加の学力である。この学力観に立てば、石巻の子ども達は学ぶ動機づけと学ぶ目的を明確に持つことができる。学力形成と地域復興を結び付けられ、学習意欲の向上にも役立つ。被災地の子ども達に懸念される、近い将来の荒れの解決策の一つになると考える。

三つ目は学校経営観の転換である。《地域の復興なくして学校の再生はなし、学校の再生なくして地域の復興はなし》のスローガンの下、今こそ被災した地域の復興と一体化した学校経営への転換を果たす時である。

まず教育目標を見直して、《子どもは10年後の石巻復興の主体となるべき、地域の宝》という子ども像を設定する。次に《地域を愛し、地域を復興する社会参加の学力》の形成を目指す教育課程を編成する。各教科と特別活動、道徳、総合の時間を見直して、カリキュラムを改編する。

すでに雄勝小では総合のカリキュラムを見直し始めた。雄勝の街並は壊滅し、地域教材は全て無くなった。総合や社会科の地域教材はどう授業するのか悩んでしまうところだが、発想の転換により新しい学習活動が見えてくる。例えば、壊滅した雄勝には復興を目指して立ち上がった漁師や硯職人が沢山いる。その身近な大人こそ子ども達に希望を与え、自己形成のモデルとなる。10年後の自分の姿である。雄勝復興に命を懸ける地域住民の熱い思いとその活動に触れる学習を構成し、子どもなりに雄勝復興の活動に参加する。

さらに、大人の目線で復興を進めている「雄勝地区震災復興まちづくり協議会」に対して、子どもの権利条約を生かして意見表明し、子どもなりのまちづくりプランを提案する。このような地域に根ざした社会参加の学力こそ、被災地を復興する学力である。そして、子ども達も主体的にまちづくりに参加することで震災から受けた心の傷を癒し、将来に希望を紡ぎ、地域を担う主権者に生まれ変わるのである。

（石巻・雄勝小学校）

〈編集部注〉

次頁のレポート「地域の復興なくして、学校の再生なし」は、徳水さんが8月19日からもたれた全教全国教研に提出したものの一部です。

紙数の関係から編集部が一部削った箇所があることをお断りいたします。

「震災体験から地域・学校・子どもたちを」

語り合おう

7月2日(土)13時から、フォレスト仙台ビルで、標記の会をもちました。開催時期として早過ぎるのではないかとという危惧をもちながらこの日を迎えたのですが、北は北海道、南は兵庫からと、他県からの参加者も多く、全体で約100名の会になりました。

会は「みんなで語り合おう」ということを掲げながらも、話題がせまくならないことと、会場の雰囲気をつくるために、あらかじめ5人の方に話題提供をお願いしておきました。

1、津波被害を受けて自校が使えず、3カ所で分散授業をつづけている石巻市立女子商業高校の実態について、千葉健一さん。
2、石巻・渡波小学校の保護者の立場から、現在の学校や子どもたちの様子を、宮教組執行委員の内海正之さん。
3、10歳で阪神・淡路大震災を体験し、現在、東北大学教育学部大学院に在学中で、いち早く現地のボランティアに入った本山敬祐さん。

4、仙台市内で、地震のために学校が使えず、学校外の施設まで使ったの分散授業をつづけている南光台小学校の高橋三代さん。

5、「あの日」、全校の子どもたちが4キロも離れた町役場のある高台に避難し、それからどうすごしたかについて、前山下第二小学校の阿部広力さん。
それぞれ15分程度のお話の後、引き続き石田一彦さん(尚綱大学)の司会でフロアーからの発言に移りました。それを石田さんはつぎのようにまとめています。

つぎつぎと発言が続いた。故郷・石巻の復興をめざしてボランティア活動に連日取り組んでいる人、自身の被災体験をそのときを思い出すように淡々と語る人、教育関係者とはちがった視点で震災をとらえ参加者に学ばせてくれた人、他県から転居して今回の震災に遭い、東北の人のあたたかさに触れた感動を語った人などなどであった。

遅くも4時半までには終了予定で始まった会は発言者が切れず、5時を回り会を止めるを得ませんでした。用意した発言をせず

にお帰りになられた方がたくさんおいでだったに違いありません。

西宮から参加した石本さんは、巨理・山元の被災地を回って帰ったとそのことを、宮教組の瀬成田さんに伝えてきました。また、北海道からの細川さんは、後日集会参加の感想をお願いしてわかったのですが、帰りに石巻まで足をのばして帰られていたのです。

臨床教育学会の田中孝彦さん(武庫川女子大学)は、会が終わったとき、「石巻に行かないとダメですね。これから日程調整をします。そのときはよろしく」と言って帰られ、8月11日から14日まで再度被災地を歩かれた。

7月2日の会には、参加したくても残念ながら参加できないという連絡もありました。その理由の一つは、授業時数確保のために土曜授業が始まったことです。このことには、会に参加できないとは別に、なんとなく複雑な気持ちになったのでした。

(かすが)



一緒に歩いていきます、

これからもずっと

細川 光

(1) しなやかでうつくしい・・・はじめての宮城

12月、第3回全国教育子育て九条の会に参加し、はじめて仙台石巻や松島を訪れました。通称バラ寺にとでも感激し、世界と通ずる日本、文化の高さを知りました。009の電車も楽しく、こんどは電車好きの生徒のために、カメラで記録しようと思っていました。

1月、第十回全国障害児学級&障害児学校学習交流集會に参加し、空港を見学、牛タンを食べて東北の仲間たちと飲みました。さりげなく入った喫茶店も、街で話した人たちも、やはりさわやかで親切で、嫌な思いを一度もしない滞在でした。北海道が失いかけた優しさに、ひさしぶりにリラックスした自分を感じていました。

そして、北海道からは思いのほか近く便利なことを、なぜ今まで気づかなかったのか損した気分になり、仙台・宮城を超気に入った私は「北海道と仲良しのお隣さん、何度も遊びにこよう!」、と決めていました。一緒に来た仲間にも「春に気仙沼に行こう! レストランのヘミングウェイでコンソメ飲みたいし、列車で岩手にも足を伸ばしたり、福島の秘湯にも行って東北巡りをするんだ。」そんな話をしていました。

水も食べ物も、酒も人も美しい宮城。わたしのあこがれの地。

震災直後は、何も、何も考えられず、頭が真っ白になりました。

その時の私は、当事者のみなさんには到底及びませんが、混乱してしまい、どうやって1ヶ月ほど過ごしたのか思い出せないでいます。毎日のようにテレビとネットで情報を探り、お酒の量も増えていました。よく言われる「映像や報道によるPTSD」に迫ったのでしよう……。

すぐにもでも訪れたかったのですが、どこに行つて、誰と話せばいいか、あてもなく、12月、1月に出逢つた仙台の人たちと、その時に住所交換をしておけばよかったと悔やみました。また、逢えるしねなんて、言葉を交わした人たちがどうなっているのか、今はわからないままです。

7月、みやぎ教育文化研究センターの集會を知り、ようやく震災後の仙台に来ることができました。

(2) 目の前の子どもを

7月、この集會で報告を聞き、どんな時でも、わたしたちは子どもたちの生きる姿に励まされていると知りました。避難所での生徒、先生、保護者の明るいやりとりに笑い、その一方で、涙さえ出ない現状に言葉をなくしました。

フロアからたくさんさんの発言もあり、聞きながらふつと自分の職場を思い出していました。5月頃、仙台の特別支援学校に、北海道から数名派遣してほしいという要請があったのです。非常に違和感を覚えました。



震災当時の恐ろしさを知らず、生徒の名まえを覚えることから実態把握をする大人が側にいるのは、子どもにとって、逆に苦しいのではないか……。障害を持つているのなら尚更、感じやすく言葉にできない思いを胸にためてしまう。地域や文化も実体験として持たず、何もかも人から聞かなくては動けない中で、どんな言葉をかけられるのだろうか……。と。現在、北海道から4名ほどの教員が派遣されたようですが（その気持ちには頭が下がります）、この形が本来のものだろうか……。

ご自身も家族を亡くし、財産を流されている心境の中、子どもの未来のために報告してくださった先生たちを見て、わたしの疑問はさらに深まりました。目の前にいる子どもを置いてまで、仙台に駆けつけるのは地元の人たちは誰も喜ばないだろうと。自分たちの苦勞を、他の人にさせたいなんて、美しい心を汲む宮城の人たちは思わない。わたしは確信していました。

報告者のひとり、阿部先生が率直に答えてくださいました。「僕もそう思います。宮城にたくさん臨時の先生たちがいる。採用したらいい。目の前の子どもをおいてまで、来るのは違うと思はいませんでした。ご自身も家を流されて、泣き言一つおっしゃってはいませんでした。みんな喉から手が出るほど助け合える仲間が欲しい。けれど、誰かの不幸や困難を招きたい訳ではない……。その意志が、わたしには平和そのもの、祈りのように思えてなりません。

(3) バスの中で

石巻まで足を伸ばし、タクシーで市内を回りました。運転手さんはとても親切で、見物客のようになりたくないけれど、そのような振る舞いになることをお詫びして、当時の様子等を教えていただきました。

運転手さんは地震直後、駐車場にいた仲間と抱き合って身体を支え合い、日和山へ車を走らせたそうです。お兄さんが亡くなり、弟家族はずっと避難所生活をされているそうです。街の

人たちは「いつも通り」淡々と過ごされてるように見えました。一生想像できない深い傷を、通りすがりのように訪れたわたしには、できる限りの想像力をもって理解に努めることしかできません。多分、街のみなさんは震災前と変らない冗談を言い、いのちをつなぐ営みを静かに続けておられるのだと思います。

わたしは、逆に途方に暮れる街の中で「ふう」の生活が存在する様子に生々しい震災の姿を見せつけられました。頭の上をたくさんの情報が飛び交う中、痛んだ土地で楽しみを持ちながら毎日を生き続ける姿。電源を切ってしまうえば終わる映像の世界ではない、むっとう立ち上る湿気と、ねっとり肌にまとわりつく空気は今でも覚えています。この感覚は、一生わたしを離すことはありません。

タクシーの運転手さんが涙を流しながら、ボランティアの皆さんにもお世話になったし、来てくれてありがとうねとバス停で見送ってくれました。返す言葉がなく、ただ、来ますと手を振りました。すぐに石巻駅から仙台駅に向かうバスに乗り、隣に座った若い女性と話しながら車中を過ごしました。綺麗なおしゃれをして友だちとお食事だそうです。家の中のドアをボランティアにかき出してもらい、やっとお化粧して出かけられるようになった、と話してくれました。日和山から見た津波は、黒い壁がずっと押し寄せてくるみたいだった、と説明してくれて、弟さんが支援学校にいたので、教員の右往左往のする苦勞話もしてくれました。

「できることをしたいんだけど、及ばない。急がなくちゃいけないのね。」とじりじりするわたしに、彼女は「そんなに深刻にならないでください。その気持ちで充分です。わたし、助けてほしいときは、遠慮なく助けてって大声で言います。その時



はどうぞよろしくおねがいます。」と言い、若くて朗らかな声がわたしの胸の中に入ってきて、重たく押し付けてしまう自分のはき違えたボランティア精神、言葉の足りなさが恥ずかしくなりました。

こんな時でさえ、わたしは宮城、仙台の人たちに素直に接してもらい、家に着くまで嫌な思いを一度もしないで過ごしてきました。この街は、東北は必ず立ち上がります。焦点をあてるのは、この土地で毎日、言葉を飲み込んで生活を続けている人たちにこそ、ではないでしょうか。時間をたくさんかけて丁寧に積み重ねていきたい……日本のみんなが被災者だと思うし、東北の行方は日本の未来の行方です。隣の北海道と一緒に考えること、行動することはたくさんあると思います。

わたしの、美しくしてしなやかな宮城へのあこがれは、変わることはありません。持ち続けたまま、一緒に歩いていきます。これからずっと。

宮城の皆さん、東北の皆さん、深く関わる当事者のみなさん、わたしやわたしたちを見捨てず、一緒に歩いてください。よろしくおねがいます。

（北海道教育子育て9条の会

編集部注：当日のお書きいただいた感想が短かったので、後日お願

いして書いていただきました。）

浜通りを通って帰りました

石本 日和子

集会に参加された皆様、とりわけ、子ども達のそばで、命と生活を支えてくださったっている先生が本当に、ありがとうございます

いました。

どの発言も子ども達とともに、被災者として生きる教師の覚悟が感じられて心を打たれました。発言に人の真実がこもっている迫力のある集会でした。人々の個別の語りを聴くところから始めることの大切さを改めて思いました。

どうぞ、心からの感謝をお伝えください。

そして、ご健康に注意なさってください。

用心して、自分の体の声も聴いてほしいとそんな時ではないと言われるのは覚悟で申し上げます。

さて、日曜日（7月3日）に、山下第二小学校と中浜小学校をみせて頂き、浜通りを通って仙台空港から帰りました。

以下は、外から眺めたものの感想でしょうかありませんが書いてみようと思つて書きました。もし、現地の先生がたが読まれて不愉快な思いをされたらごめんなさい。

＝ ＝

圧倒的な喪失感、虚無感に打ちのめされました。

何にもないのです。

タクシーの運転手さんの話では自衛隊さんが、片づけてくださったと言つてくれました。

しかし、降りてみるとそここに、おしゃれなハイヒールだったり、ぬいぐるみだったり落ちていて確かに、ここに、生活があつたのだと分かるのです。小学校は、曲がりくねり、捨てられています。山元町

というところは、いちご農家で裕福だった所だそうです。子ども達の人数も少なく小学校みんなが仲良く、学習にも熱心だったとタクシーの運転手さんは話してくれました。

事実、校舎は鉄筋ですが、内装は、本当に素敵な木のつくりで屋根は瓦ぶきです。西宮の学校よりもずっと親密で丁寧な地域の小学校、だったのだと思いました。だからこそ、小学校の先



生は、1年生の子どもたちを励まし、6年生の子どもたちを頼りにして5キロもある道を避難させられたのだと実感しました。

津波に追いかけられながらどんなに怖くて大変だったことでしょうか。しかし、普段から絆のある学校でその力がはぐくまれていたからこそ、無事に避難できたのだと実感しました。

近くの自動車学校の生徒や教員は壊滅的だったと聴きました。

老人ホームの職員も老人をかかえるようにしながら津波に飲み込まれた人もいたと聴きました。

むごいことです。

さらに、裕福だったイチゴ農家のみなさんは（残っている家の土台を見ると、大きくて立派な家が多かったです）収穫の時を流してしまいました。手に入るべきお金が入らず残ったのは借金だけで、しかも、畑には海水が流れ込み、仕事の目途が立ちません。生活が成り立たない荒野に投げ出されているのです。

宮城の先生の話では、お弁当を持ってこられない子が出てくるそうです。

アメリカ軍は、仙台空港だけを復旧して去りました。自衛隊は、津波の後片付けをして去りました。世論は、原発に向いていません（それも、充分ではありませんが）。津波を生きのびた人々が捨てられています。ひよつとすると、政策的に捨て去られているのかもしれない。

そして、土地や漁業権を放棄せざるをえない条件を作り出し、TPPで、一気に農業団地や、漁業工場を作る復興を押し付ける気なのかもしれません。

私に、何ができるのか考えています。私は、瓦礫の撤去やド口運びにはあまり役に立ちません。でも、もし、私の読み語りやたのしいゲームや小川嘉憲さんと一緒なら、漫才もできちゃったりするお笑いを生かせる場があるのなら役立てて頂きたいのです。

広大な虚空の中には人の死を悼む花すらありませんでした。

ゴミになるからと規制がかかっているのかもしれないが、献花もないという事実はやりきれない思いを増幅しました。

それだからこそ、個別の話をうかがいながら、共に悼むことから、私のささやかな支援を始めたと思います。

勝手な感想でごめんなさい。

現地で私がかざれることがあれば喜んで参ります。

（編集部注：宮教組書記長・瀬成田さんへのメールをセンターホームページに載せさせていただきました。そこからの転載です）

（西宮・小学校教師）

派遣で来ています

鈴木 真之助

東京から派遣され、現在、宮城農業高に勤務しています。

教員がみな派遣され、当時のことは「口にも出すのも嫌」ということではなかなか聞くことができませんでしたが、生徒とこれから関わっていくなかで、どうしても聞きたいと思っていました。

今日、さまざまな立場の人から話をきくことができ、参考になりました。ありがとうございます。

宮農の先生方、事務職員の方、にこやかに仕事をしていますが、時々「夜眠れない」という声を聞きます。

われわれ派遣された人間も全力で支えています。自分は被災していません。本音に触れることができません。宮城県の皆さんの支援をお願いします。

（東京・教員）



次にどうつなげ、語っていくか

朝岡 晶子

集会の最初のあいさつで、中森さんが「きけわたつみの声」のことばである「生き残った者として何をすればいい」を紹介されましたが、報告者の方はじめ、フロアーの方たちのご発言はどれも、このことばをそれぞれの受けとめ方で受けとめ、日々、生きていらつしやるのが感じられるものでした。きよう、ここに参加した私（たち）が、このことを次にどうつなげ、語っていくのが、問われていると思っています。

（東京・編集者）



● 会員から

いま動き出している事実をこそ学びたい

藤田 康郎

大震災のあと、子ども達に当日のことを書いてもらいました。たまたまインフルエンザによる休校で、ある男の子は下北沢のゲームセンターにいました。彼はクレーンゲーム機が「ユラサナイデクダサイ！ユラサナイデクダサイ！」と叫ぶのを聞きました。そして自宅まで2時間かけて徒歩で帰宅。ある女の子は直後にリュックに非常食を詰めて保育園へ弟を迎えに行きます、別の子は怖くて一人では眠れなくなりました。東京の子ども達もそれぞれ地震の影響を受けてしんどい思いをしていたことがわかりました。「ぼくも同じだった」「ほんとうに怖かったね」と共感し合ったり、「下北沢からよく一人で歩いて帰れたね」とか「私なら非常食をリュックに入れることもできなかったのに、保育園に迎えに行ってくれ」と友達に驚いていました。

その後宮城の先輩から子どもたちの作文を送ってもらい、クラスの子どもたちに読ませました。子どもたちは衝撃を受けました。おじいさんが学校に迎えに来てくれたのに、地区の人たちを探すために、また、地域に戻って行った話には「かわ

いそうに、さびしかったろうね」避難所で毎日水をくむ仕事をしていた話、石巻に出かけたお母さんが無事に戻ってきた話など自分たちとは比較できないほどの体験を同じ年の子どもがくぐってきたことを知って、大変驚いていました。作文の中に「自分たちよりひどい体験をしている津波被害の人たちのためにできることをやりたい」との記述があり、「わたしは自分たちだって被災者なのに、もっと大変な被災者のことを考えているところに感動しました」と発言する子どもがいました。

私は9月18日に雄勝に行きました。小学校や病院、港の姿を見ると胸が締め付けられます。あの日のことはとても想像すらできない情景でした。「OH ガッツ」の取り組みと船越の漁師中里さんの話を伺うことができました。復興に向けた具体的な話をたくさん聞き、雄勝の方々はとつづく昔から前を向いて歩いてきたことを知り、大変励まされました。私はその時うちのクラスの子どもたちが宮城の子どもの作文から読み取ったことは被災地の子どもたちは避難所で、あるいは日常生活の中で確かな一歩を歩き出していることに心を動かされたのだと気が付きました。

いま動き出している事実をこそ、子どもたちと学びたいと考えています。

（東京）